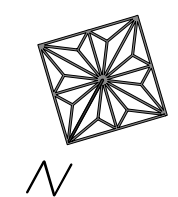
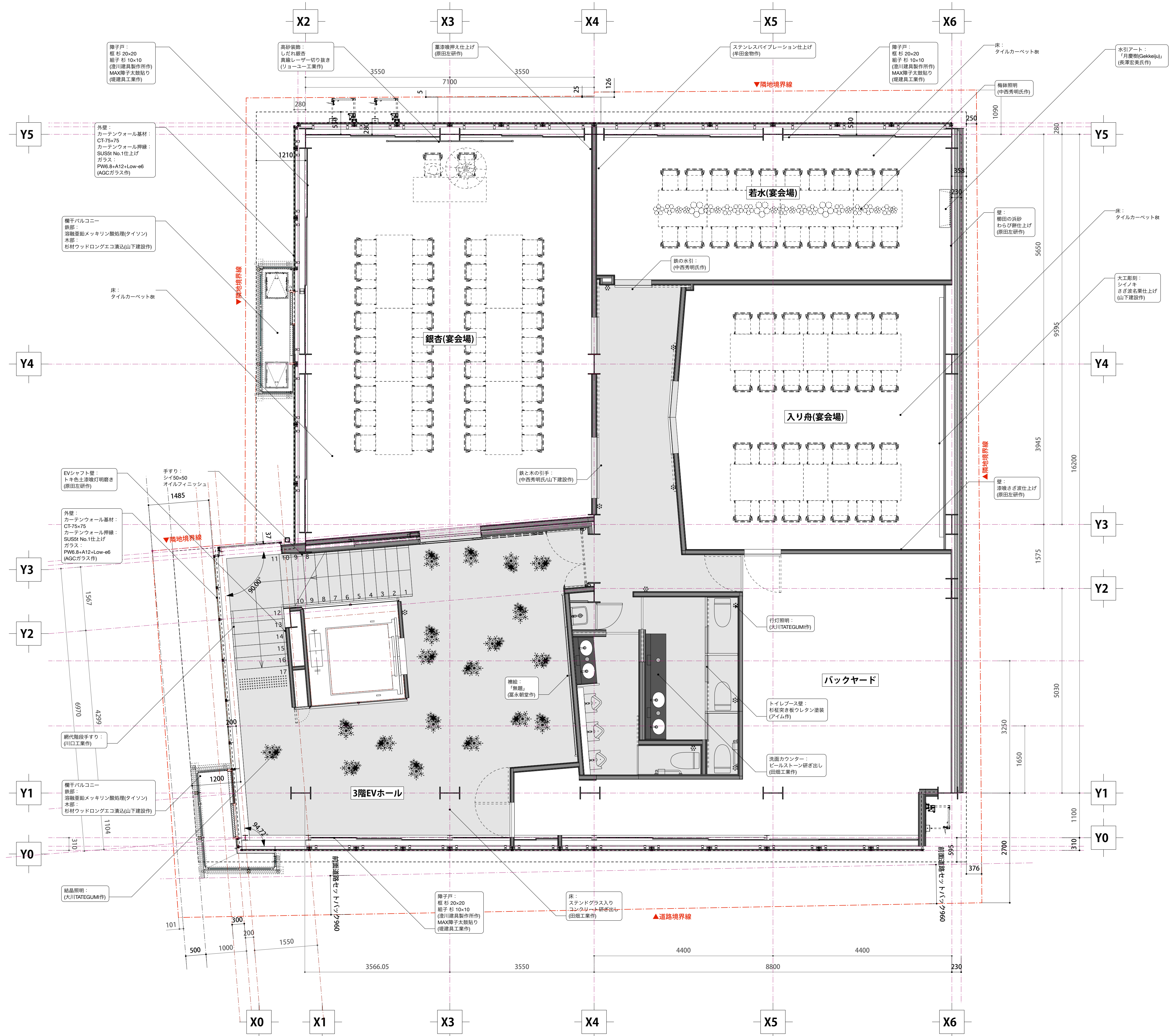
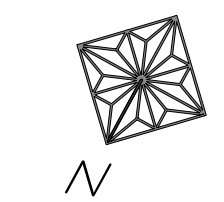
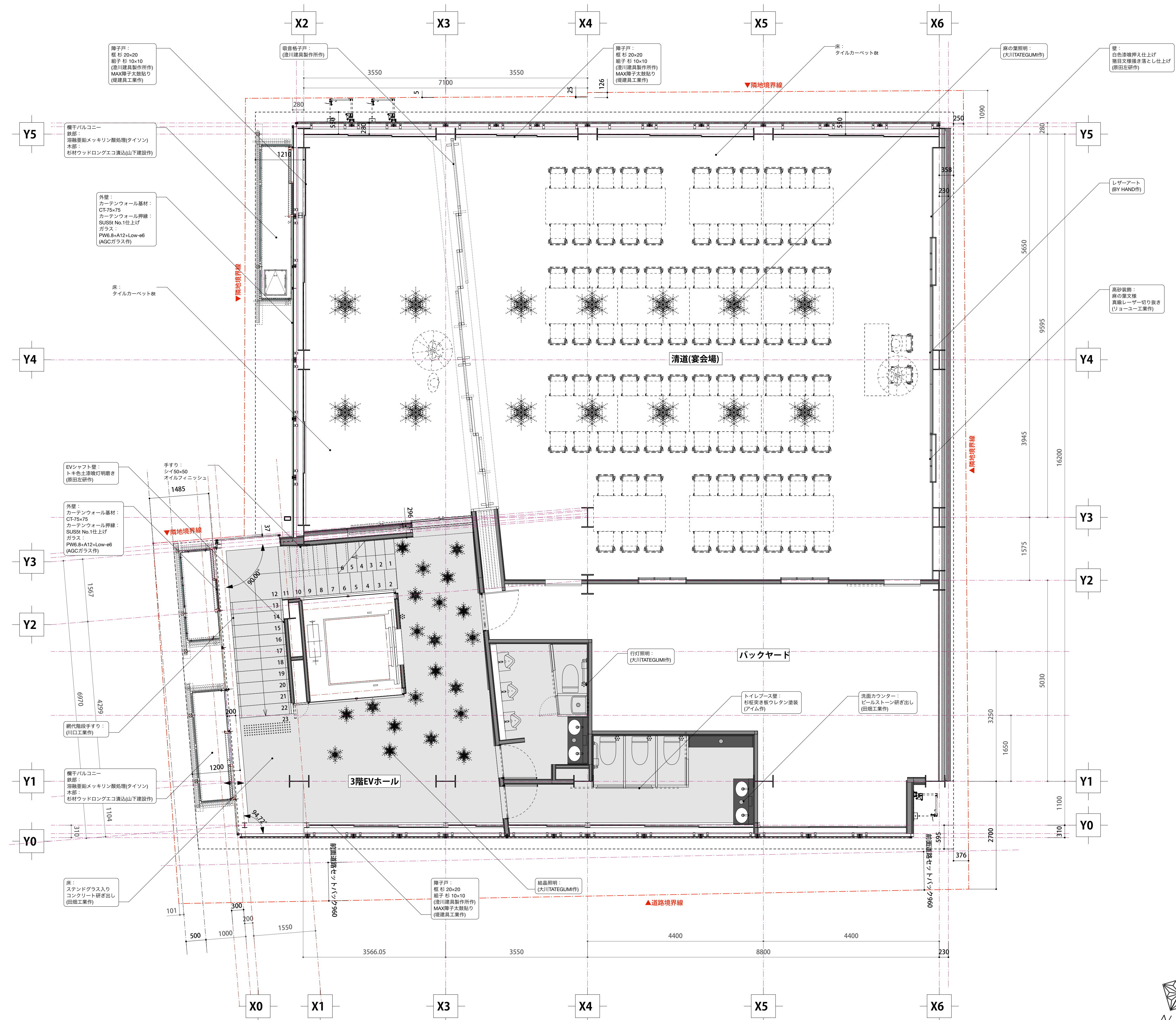


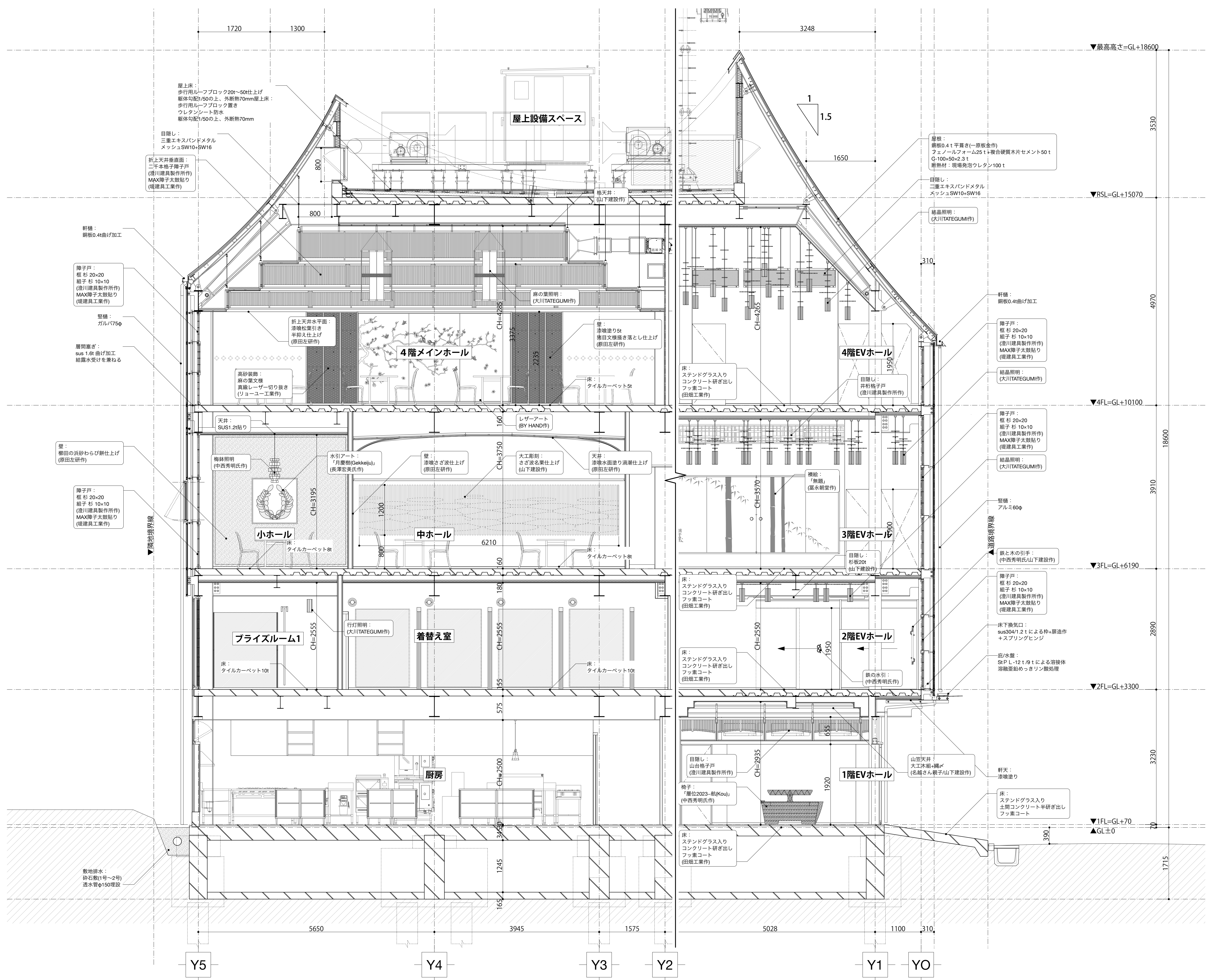
2階平面図

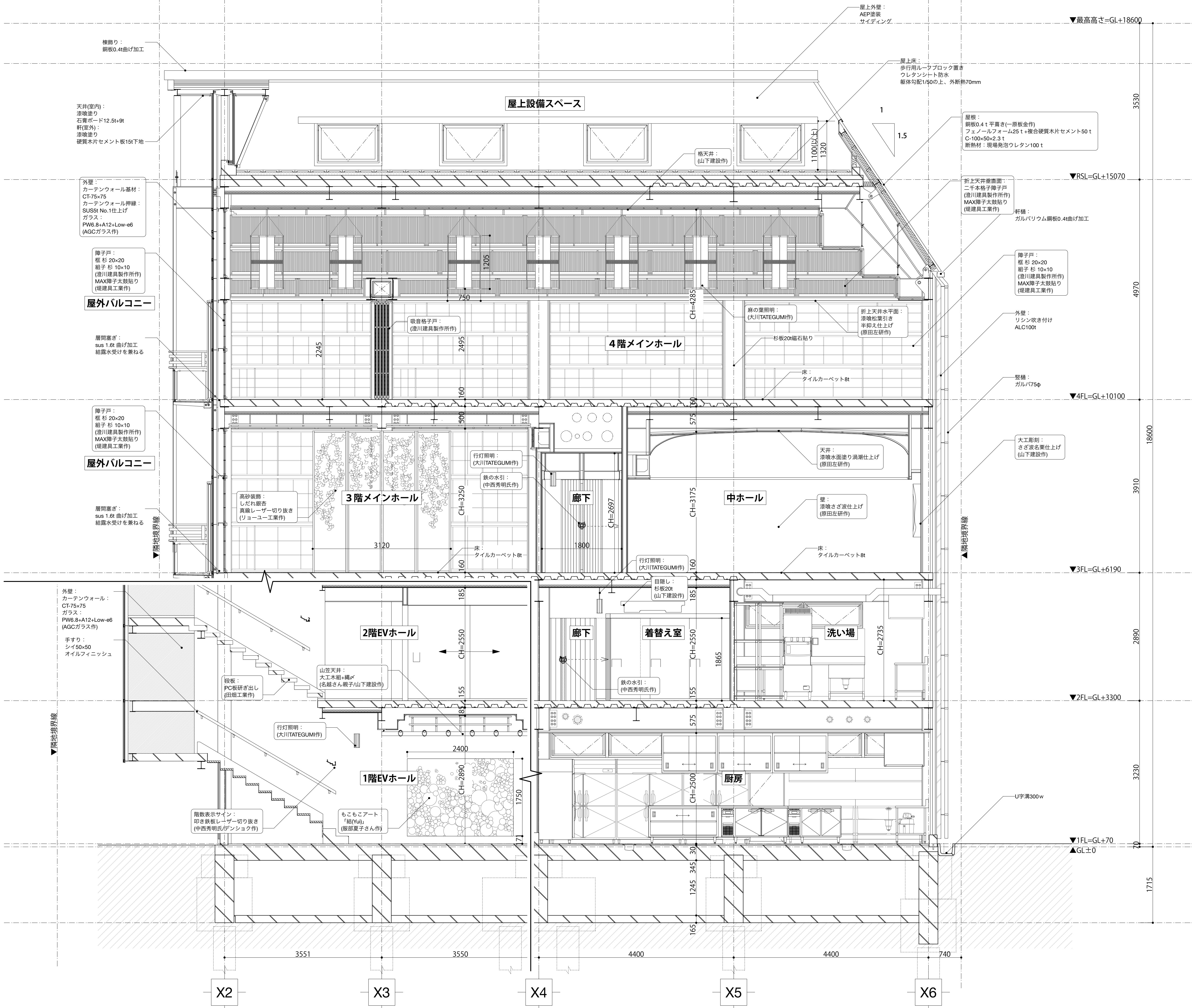


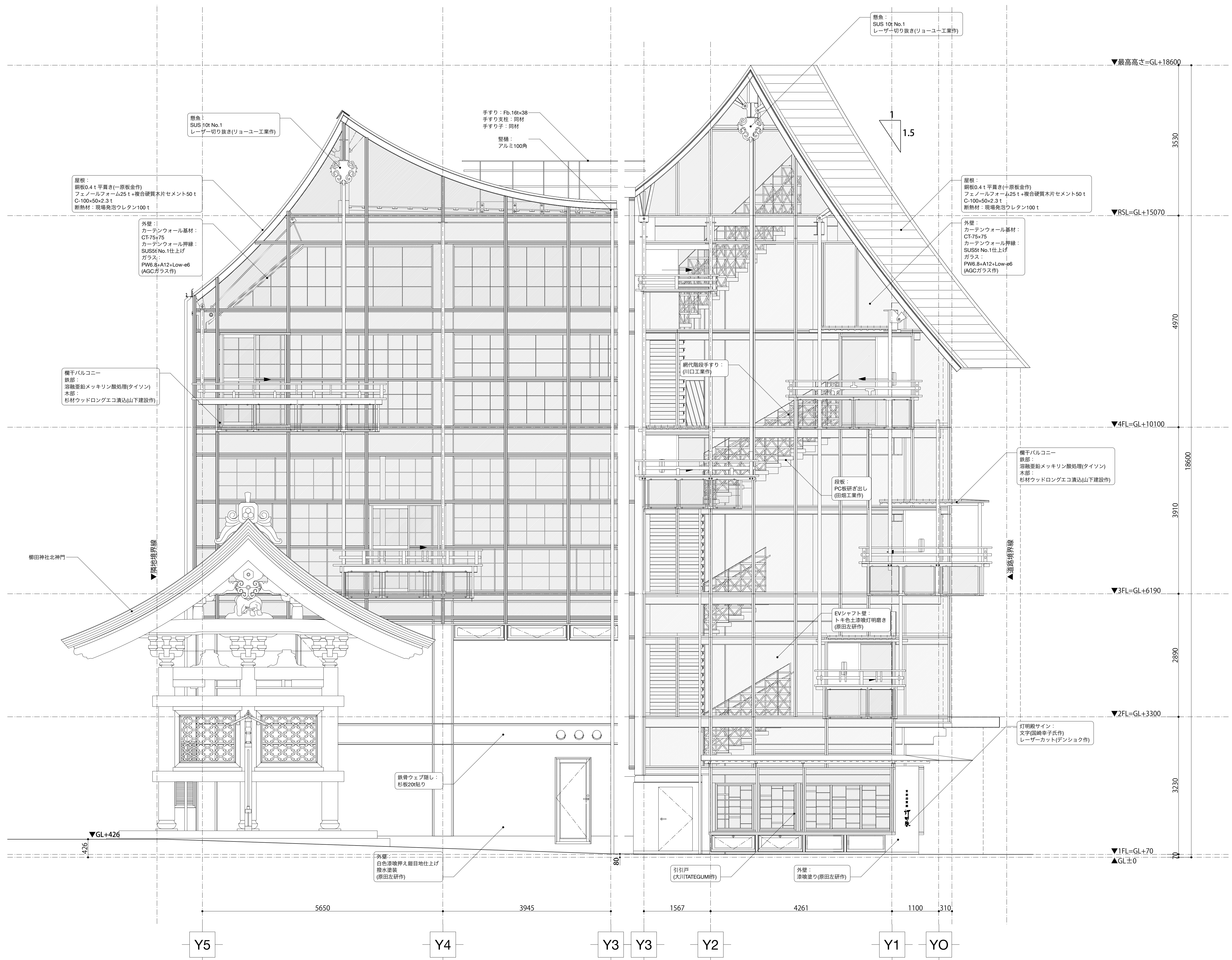
3階平面図



4階平面図





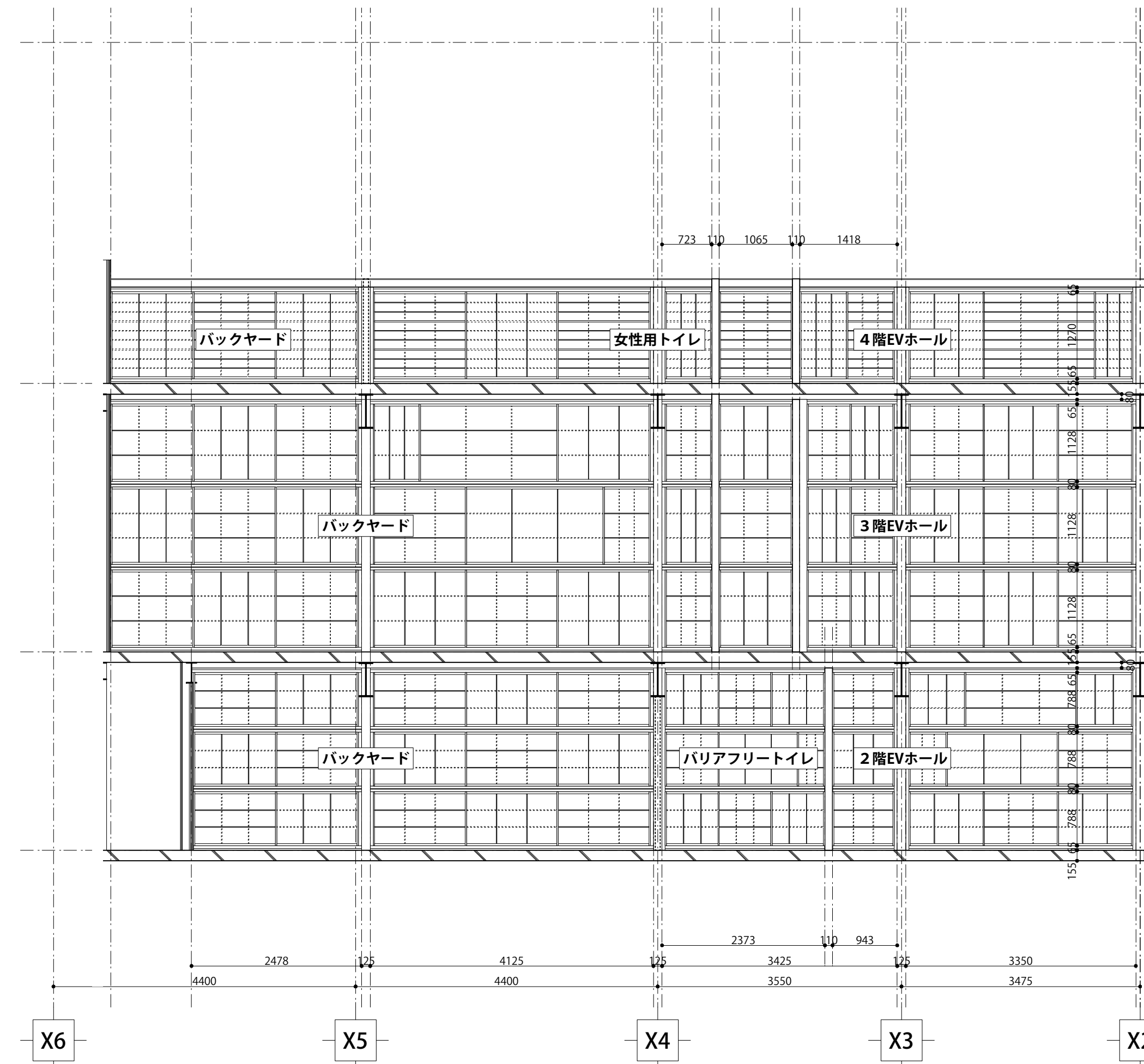
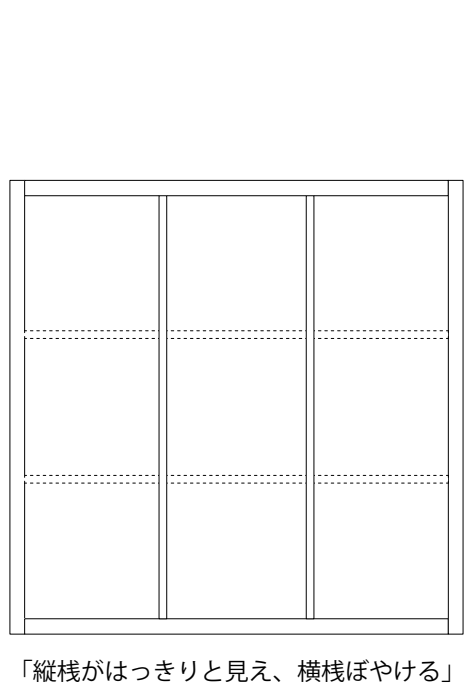
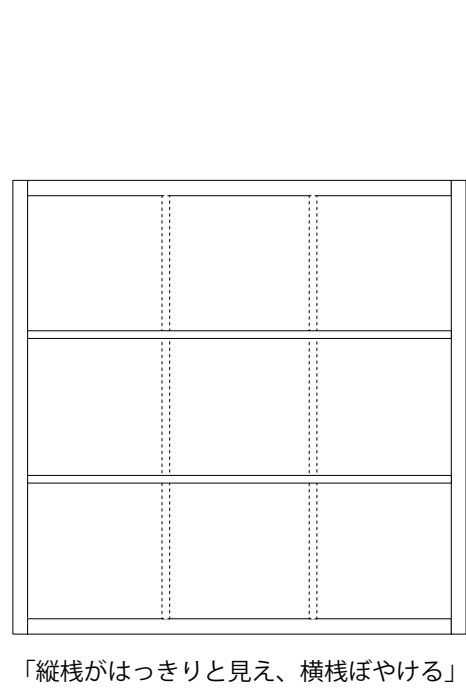
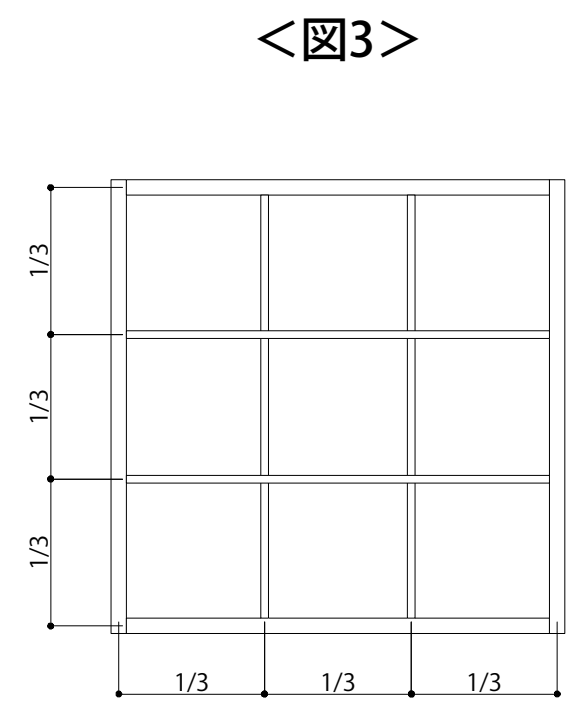
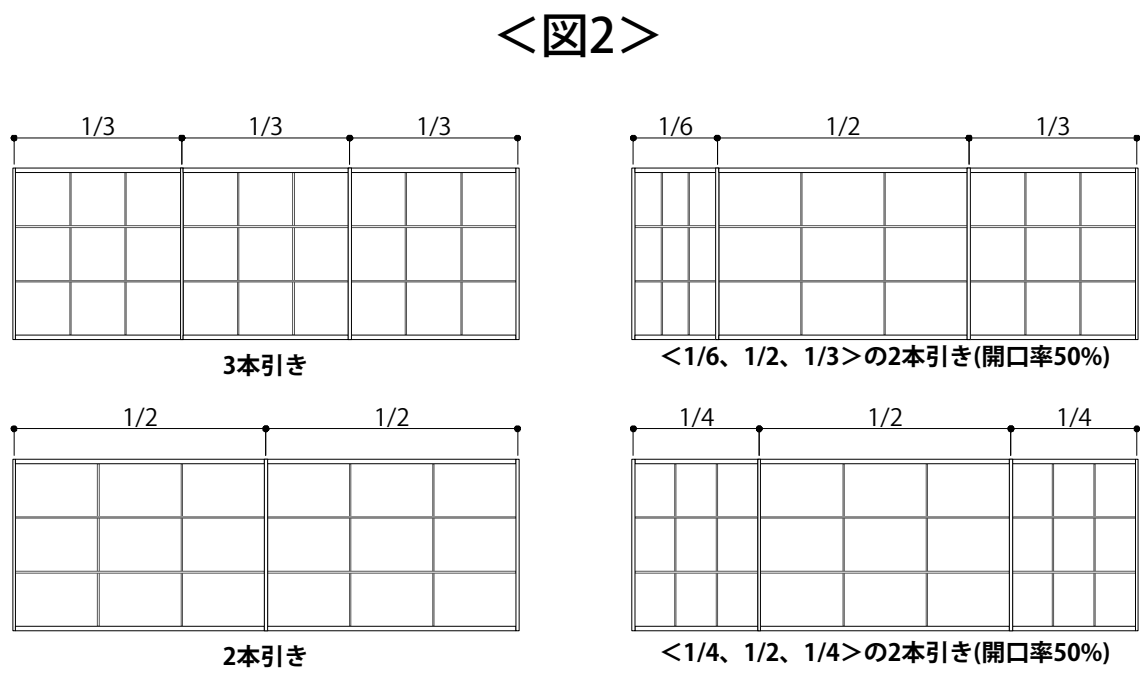
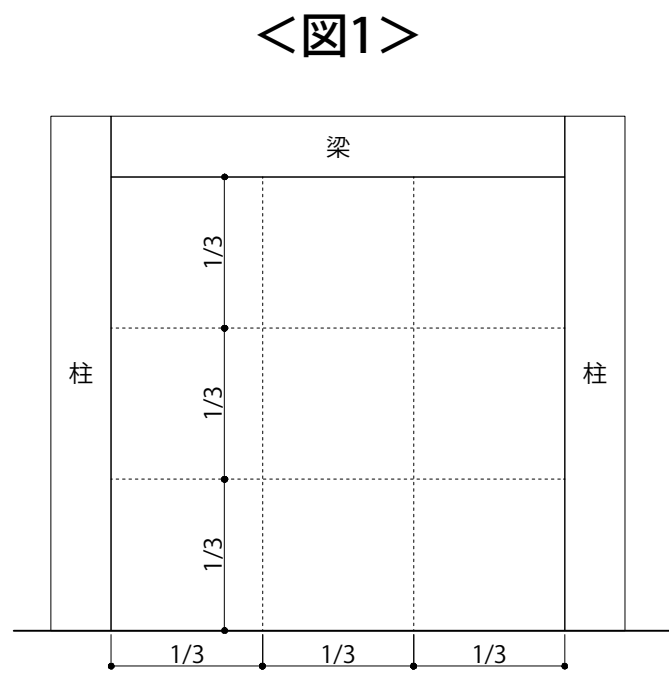


障子戸の建具割と棧割について

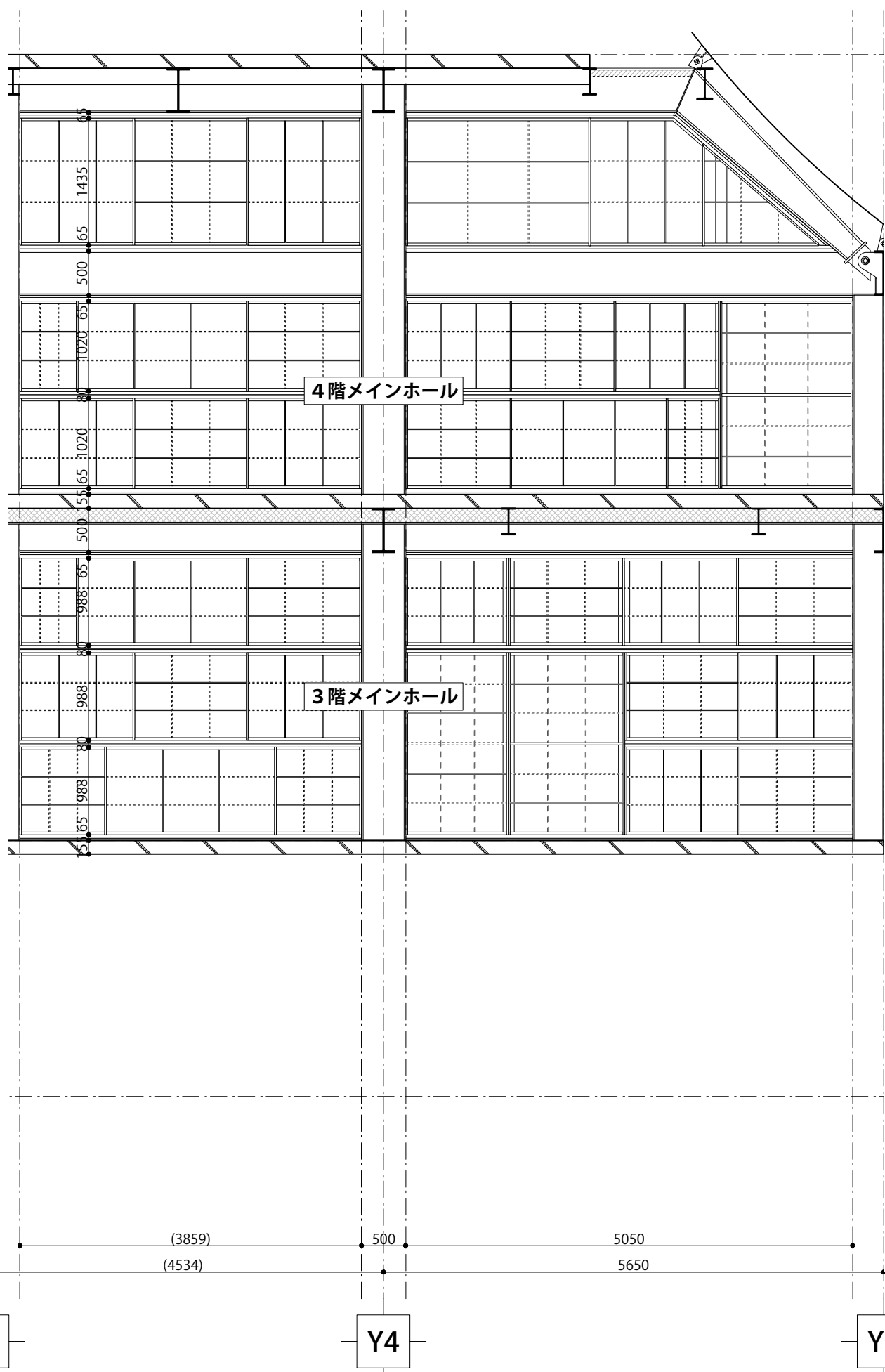
灯明殿の障子戸は、カーテンウォールとダブルスキンを形成するため、床から梁下いっぱいまで計画した。野太い鉄骨に囲まれた矩形の中での建具割は、いわば階層を縦横断する構造的なスケールをヒューマンスケールへと分解する作業ともとることができる。人の出入りを想定しなくて良いため、一般的な障子戸から少し外したスケール感を狙って、柱間と床梁間をそれぞれ三等分することを原則とした。<図1>
ちなみに写真や絵画などの視覚芸術の分野では、「三分割法」という法則があり、これは画面をタテヨコ三等分した線の交点上に主題を置くと、構図のバランスがとりやすいというものである。障子戸を開けて、神社境内の風景を切り取れば、三分割法に近い構図が成立する。

柱間と床梁間は場所ごとに異なるため、それらに呼応するように各障子戸はプロポーションを変えていく。それらがよりリズムカルに見えるよう、通常の三本引き、二本引きに加え、<1/6、1/2、1/3>で割った二本引き、<1/2、1/4、1/2>で割った二本引きを追加した。<図2>外からは各階の障子戸が一度に見えるため、全体のバランスを意識して、配置のエスキースを行った。

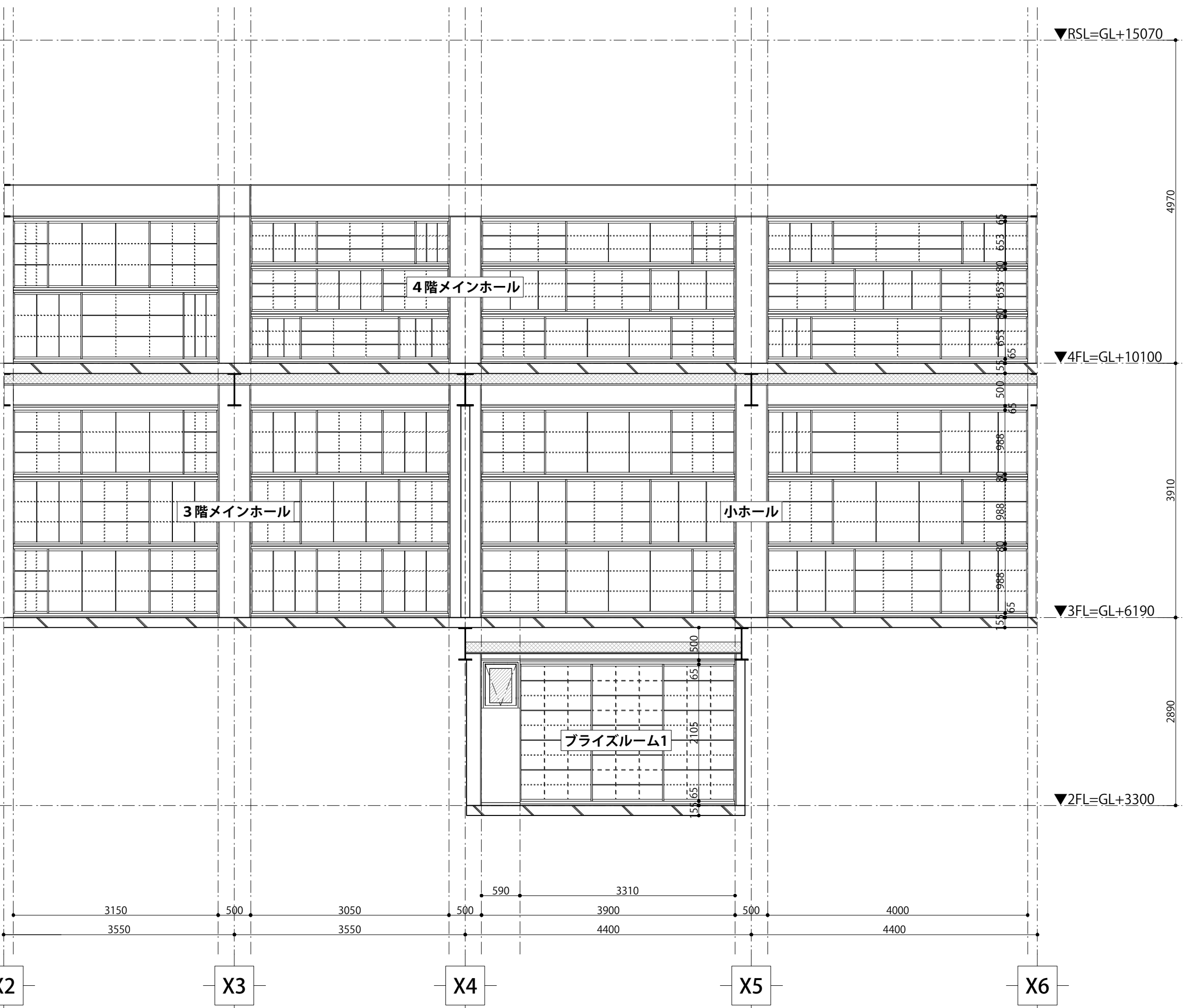
棧の割は、各障子戸のプロポーションの変化を感じ取りやすよう、一枚あたりタテヨコ三等分とした。<図3>
さらに障子特有の棧の影絵を、より豊かなものにするため、建具自体の断面形状を工夫し、「縦棧がはっきりと見え、横棧ぼやける」ものと「横棧がはっきりと見え、横棧ぼやける」の2種類の棧の影の出し方を作った。<図4>
配置はそれらが交互になるようにしたため、上記の建具形状と組み合わせると、無数にある障子戸のうち、おそらく一枚も同じ障子戸は存在しない。



【北側障子面展開図】



【東側障子面展開図】



【南側障子面展開図】